

令和5年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第2号（5月予報）

発表日：令和5年4月28日

岩手県病害虫防除所

1 情報の要点

(1) 水稻

- ア 育苗期の細菌病類・苗立枯病はやや多の予報です。緑化～硬化期の適正な温度管理に努めましょう。
- イ 育苗期のいもち病はやや多の予報です。稲わら、籾殻等は伝染源になるので、育苗施設内やその周辺から取り除きましょう。

(2) 麦

- ア 赤かび病はやや多の予報です。防除適期に基本防除を必ず実施するとともに、降雨が続く場合は追加防除を実施しましょう。また、生育が早まっているので、防除適期を逃さないように防除を実施しましょう。

(3) りんご

- ア キンモンホソガは多、第1世代羽化盛期が早い予報です。前年秋期に多発した園地では特に注意してマインを観察するとともに、生育が早まっているので適期を逃さないように薬剤防除を実施しましょう。
- イ リンゴハダニはやや多の予報です。多発園では落花期に防除しましょう。

2 農薬の安全使用

- (1) 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。
- (2) 水稻等で箱施用剤を使用する場合には、後作に影響のない場所で使用するか、ハウス内では無孔のビニールシートを使用する等、農薬が土壌に残留しないよう対策を徹底しましょう。

【利用上の注意】

本資料は、令和5年4月19日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・ 農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・ 農薬使用の際は（1）使用基準の遵守 （2）飛散防止 （3）防除実績の記帳を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/index.html>



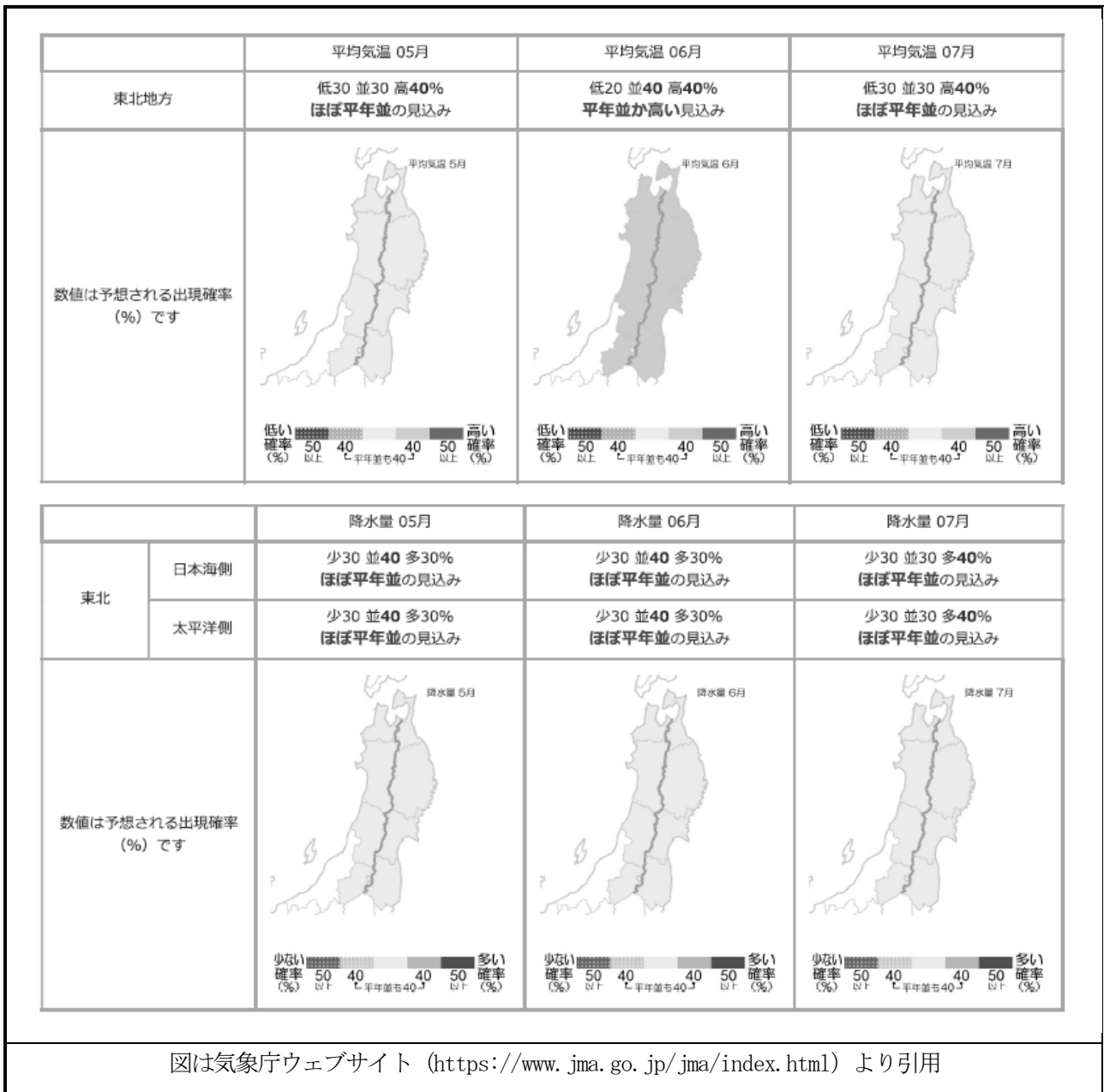
3 3ヶ月予報（5月～7月、4月25日発表）

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

6月 期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

7月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。



水稻病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
細菌病類 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	(育苗期)	やや多	(1) 前年の出穂・開花期の気象は籾への感染に好適であった。(+) (2) 育苗施設の巡回調査(4/19~21)では、一部の施設で発生が確認された。(+) (3) 5月の気温は、ほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
苗立枯病 (ムレ苗含む)	(育苗期)	やや多	(1) 育苗施設の巡回調査(4/19~21)では、例年並に発生量は少なかった。(±) (2) 4月後半に低温に遭遇した。(+)
ばか苗病	(育苗期)	やや少	(1) 前年の本田での発生は平年並であった。(±) (2) 育苗施設の巡回調査(4/19~21)では、発生程度は低かった。(－) (3) 効果のある種子消毒剤が例年並に広域で使用されている。(±)
いもち病	(育苗期)	やや多	(1) 前年の穂いもちの発生量は平年より多く、罹病わら・籾殻等の伝染源量も平年より多いと考えられる。(+) (2) 効果のある種子消毒剤が例年並に広域で使用されている。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 育苗期は適切な温度・水管理を心がける。
- (2) プール育苗の場合、湛水深は第2葉が出始めたら培土表面より上となるよう管理する。中途半端な湛水管理は病害発生の原因となるので注意する。

【細菌病類】

○2月6日発表 病害虫発生予察情報 注意報第1号（細菌病類）を参照し、以下の対策をとる。

- (1) 緑化～硬化期の高温（ハウス温度25℃以上）は発病を助長するので、適正な温度管理（ハウス温度日中20～25℃）に努める。
- (2) 朝、外気温が低くても日射によりハウス内の温度は急激に上昇している場合があるので、ハウス内の温度や被覆資材内の温度をチェックするとともに、早めに開放する。
- (3) 発病苗はすぐに処分し、本田に移植しない。

【苗立枯病】

- (1) 乾燥や多湿が繰り返されると発病が助長されるので、乾かしすぎや過かん水、プール育苗における不完全な湛水管理を避ける。
- (2) ピシウム属菌、フザリウム属菌による苗立枯病は、低温で発病が助長されるので、霜注意報発令時等の低温の恐れがある時は、夜間のハウス内の保温に努める。

<病原菌別の発生要因>

病原菌	発生要因
リゾプス属菌	①床土や育苗施設、資材の汚染、②出芽時の高温（32℃以上）、③緑化、硬化時の低温（10℃以下）、④傷もみ、玄米の混入、⑤過湿、窒素過多、高密度播種
トリコデルマ属菌	①床土や育苗施設、資材の汚染、②保水力の小さい乾きやすい床土、③pHが4.0より低い土壌、④乾燥、過湿の繰り返し
フザリウム属菌	①緑化、硬化期間中の低温（10℃以下）、②乾燥、過湿の繰り返し、③過かん水と過湿（プール育苗での低水位も該当）
ピシウム属菌 (ムレ苗)	①低温（4℃以下）、②pHが5.5より高い土壌、③川や池の水を使用、④過かん水と過湿（プール育苗での低水位も該当）

【ばか苗病】

- (1) 稲わら・籾殻等は伝染源になるので、作業室や育苗施設及びその周辺に置かない。
- (2) 育苗箱内のばか苗病発病株は見つけ次第抜き取り、焼却するか土中に埋めて本田に持ち込まない。

【いもち病】

- (1) 覆土を丁寧に行い、籾を露出させない。かん水等で籾が露出しないように注意する。
- (2) 昨年は穂いもちが多発したため、保菌している稲わら・籾殻等が多いと考えられる。これらはいもち病の伝染源になるので、育苗施設内やその周辺に放置しない。
- (3) 防除を実施する場合は、育苗期間中に適用のある有効な薬剤を選択する。
- (4) 移植が遅れる場合、育苗期間中に発病する可能性があるので注意する。

3 防除上の留意事項

- (1) 箱施用剤を使用する場合には、後作に影響のない場所で使用するか、ハウス内では無孔のビニールシートを使用する等、農薬が土壌に残留しないよう対策を徹底する。
- (2) 箱施用剤は使用基準（使用時期、1箱当り処理量）を遵守するとともに、育苗箱に均一に処理する。
- (3) 育苗期防除を実施する際は、生物農薬と併用できない薬剤があるので注意すること。

水稻虫害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
イネミズゾウムシ	本田侵入盛期 やや早	並	(1) 4/27現在の有効積算温度で予測された本田侵入盛期は、平年よりやや早い。 (2) 前年の発生量は平年並であり、越冬量は平年並と考えられる。 (±)
イネドロオイムシ	本田飛来時期 やや早	少	(1) 4月の気温は概ね高温で経過した。 (2) 前年の発生量は平年より少なく、越冬量は少ないと考えられる。 (-)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ】

- (1) 両害虫ともに、前年箱施用剤による一斉防除を行った地域、および前年少発生の地域では、防除は不要である。
- (2) 前年に多発した圃場では、移植時に箱施用剤による防除を行うか、イネミズゾウムシでは成虫侵入盛期、イネドロオイムシでは産卵盛期に発生状況を調査し、防除要否を判断する（表1）。
- (3) 薬剤防除を実施しない場合は、前述の時期に同様の調査を行い、翌年の防除要否を判断する（表1）。

表1 イネミズゾウムシ、イネドロオイムシの防除要否判定基準（平年の場合）

病害虫名	判定および防除時期	判定方法	当年の要防除水準	翌年の要防除水準
イネミズゾウムシ	成虫本田侵入盛期	畦畔から2m程の場所から水田中心に向かって連続25株調査（水面下の株元まで見る）	成虫数	成虫数
	県中、南部：5月下旬～6月上旬 県北、山間部：6月中旬		8頭以上/25株	3頭以上/25株
イネドロオイムシ	産卵盛期	連続25株調査（水面下の株元まで見る）	卵塊数	卵塊数
	県中、南部：6月上旬 県北、山間部：6月中旬		13卵塊以上/25株	3卵塊以上/25株

【斑点米カメムシ類】

- (1) アカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期に合わせて、地域一斉に増殖場所である水田畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道の草刈りを行う。なお、ふ化盛期は気象経過により変動するため、農作物病害虫防除速報（5月中旬発表予定）を参考にすること。
- (2) その後もイネ科植物が出穂しないような管理を心がける。

表

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
うどんこ病	—	少	(1) 前年の発生量は平年並に少なかった。(—) (2) 耐病性の強い品種が、広く作付けされている。(—) (3) 5月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
赤かび病	早	やや多	(1) 「ゆきちから」の減数分裂期は平年より10日早い(作況圃)。 (2) 前年の発生量は、平年よりやや多かった。(+) (3) 赤かび病抵抗性「やや弱」品種「ゆきちから」の作付けが多い。(+) (4) 5月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
赤さび病	—	並	(1) 前年の発生量は、平年並だった。(±) (2) 耐病性の強い品種の作付割合は、昨年と変わらない。(±) (3) 5月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(--)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【うどんこ病】

- (1) 前年及び既に発生が見られた圃場では、防除を実施する。
- (2) 防除時期の目安は、穂ばらみ期及びその7～10日後である。

【赤かび病】

○4月20日発表 農作物病害虫防除速報 No. 2（赤かび病）を参照し、以下の対策をとる。

- (1) 赤かび病菌は、開花した穂に感染する。このため、開花期の防除が最も効果的である。ナンブコムギ、銀河のちからは、開花期の1回防除で効果が得られる。ゆきちからは、開花期と開花7～10日後の2回防除が必要である(表1)。
- (2) 開花期以降に曇雨天が続く場合、ナンブコムギ、銀河のちからは1回目散布の7～10日後に、ゆきちからは2回目散布のさらに7～10日後に、追加防除を実施する(表1)。

表1 小麦主要品種の防除適期

品種名	赤かび病抵抗性	防除適期		
		開花期 (1回目散布)	1回目散布の7～10日後 (2回目散布)	2回目散布の7～10日後
ナンブコムギ 銀河のちから	中	必須	状況に応じて追加散布	—
ゆきちから	やや弱	必須	必須	状況に応じて追加散布

【赤さび病】

- (1) 前年及び既に発生が見られた圃場では、防除を実施する。
- (2) 防除適期は、発病が見られた時及びその7～10日後である。
- (3) 下葉からまん延するので、下葉にも十分薬液がつくように散布する。

3 防除上の留意事項

- (1) 同一薬剤の連用又は同系薬剤の連用は、耐性菌が生じる恐れがあるので、効果の高い薬剤を輪番で使用する。

りんご病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	やや早	やや多	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年よりやや高かった。(+) (3) 5月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
モニリア病 (実ぐされ)	やや早	並 (平年少発生)	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年の発生園地率は平年並に少なかった。(±)
赤星病	－	並 (平年少発生)	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(－)
うどんこ病	－	並 (平年少発生)	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(－)
斑点落葉病	－	並	(1) 5月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
腐らん病	－	並	(1) 開花直前の巡回調査では、発生園地率は平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

(1) 5～6月は、多くの病害の重点防除時期である。防除薬剤の散布間隔が空きすぎないように注意するとともに、降雨前の予防散布を心がける。

【黒星病】

- (1) 黒星病を対象としたDMI剤及びSDHI剤の使用は、耐性菌出現を回避するため、落花期までとする。
- (2) 散布ムラが無いように十分量を丁寧に散布する。
- (3) 発病葉や発病果は二次伝染源となるので、速やかに摘み取って園地外へ持ち出し、地中に埋没させる等して処分する。
- (4) 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。
- (5) 苗木及び未結果樹も成木と同様に防除を徹底する。

【モニリア病】

(1) 葉ぐされ、実ぐされは早めに摘み取り処分する。

【赤星病】

(1) 開花直前散布や落花期散布に黒星病対象のDMI剤により同時防除する。

【うどんこ病】

- (1) 開花直前散布や落花期散布に黒星病対象のDMI剤やカナメフロアブルにより同時防除する。
- (2) 前年多発園では、落花期にコナケシ顆粒水和剤を特別散布する。

【褐斑病】

(1) 前年発生園では、落花期散布～落花20日後散布にデランフロアブルやセルカディスDフロアブル、ラビライト水和剤を用いる。

【腐らん病】

- (1) 罹病枝は開花期頃が最も発見しやすいので、園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努める。
- (2) 腐らん病は、発生樹に隣接する樹に翌年も発生する傾向があるので、発病歴のある樹及びその隣接樹は注意して観察する。
- (3) 枝腐らんや胴腐らんは見つけ次第、剪除や削り取りを行い、切り口や削り取り部に薬剤を塗布する。6月以降、病患部からの孢子飛散が多くなるので、遅くとも5月中には処置を完了する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さないよう処分を徹底する。

りんご虫害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	—	並	(1) 4月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並だった。(±)
キンモンホソガ	第1世代羽化時期早	多	(1) 基準圃場（北上市成田）での越冬世代の羽化時期は、平年より早かった。 (2) 有効積算温度から推測される第1世代の羽化盛期は、平年より早い。 (3) 前年の第4世代の発生園地率は、平年より高かった。(++)
リンゴハダニ	早	やや多	(1) 基準圃場（北上市成田）でのふ化時期は、平年より早い。 (2) 3月下旬の巡回調査での越冬卵の寄生園地率は、平年より高かった。(+) (3) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ナミハダニ	—	並	(1) 4月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並だった。(±) (2) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
果樹カメムシ類	—	やや少～並	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は、盛岡市では例年より少なく(-)、金ケ崎町では例年並であった。(±) (2) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類】

- (1) 落花期にハマキムシ類、アブラムシ類等を対象に有機リン剤を用いる。
- (2) 訪花昆虫導入園では、それらに影響のないIGR剤やBT剤、ジアミド剤を用いる。

【キンモンホソガ】

- (1) 多発園（20果叢当たり5マイン以上の発生園）では、第1世代の羽化状況に応じて第2世代を対象とした防除を行う。前年多発園地では、本年も多発傾向にあるので、注意してマインを観察する。
- (2) ネオニコチノイド剤は羽化始期～羽化揃期、IGR剤は羽化始期～羽化盛期に使用すると効果が高い。羽化始期は羽化盛期の5日前、羽化揃期は羽化盛期の5日後が目安である。

表 キンモンホソガ第1世代羽化盛期及び防除適期の予測（4月26日現在）

地点名（標高）	羽化盛期（予測）	ネオニコチノイド剤による防除適期	羽化盛期（平年値）
盛岡（155m）	6月13日	6月8日～6月18日	6月第5半旬
北上（61m）	6月6日	6月1日～6月11日	6月第3半旬

- ※ 平年値は、平成25年から令和4年までのフェロモントラップへの誘殺盛期の平均からみた羽化盛期。
- ※ 羽化盛期は、当年の越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期（北上は4月第2半旬、盛岡は4月第4半旬）を起点とし算出（平成22年防除技術情報）。
- ※ 4月25日まではアメダス現況値を、4月26日以降は平年値を利用した。
- ※ 観測地点の標高より100m増すごとに羽化盛期は3～4日遅れるので注意する。

【ハダニ類】

- (1) リンゴハダニの発生が多い園地では、落花期にサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤、バロックフロアブルを用いる。なお、リンゴハダニ、ナミハダニの両方がみられた場合は、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布（落花期、落花10日後）が有効である。
- (2) ナミハダニの発生が多い園地では、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布を行う。

【モモチョッキリゾウムシ】

- (1) 前年被害が目立った園地での落花期の防除薬剤は、効果の高い合成ピレスロイド剤を用いる。

【果樹カメムシ類】

- (1) 越冬成虫の飛来は、落花期前後から見られることが多い。例年発生が見られる園地では、この時期以降特に注意して観察を行う。
- (2) 飛来観察は、果実が餌となる周辺部の樹木（サクラ、クワ、キリ等）や防風ネット等も併せて随時行う。
- (3) 大量の飛来が確認された場合は、ただちに効果の高い薬剤を特別散布する。
- (4) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。
- (2) サンマイト水和剤は、マメコバチに対して影響があるので注意する。

ねぎ

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ネギコガ	早	並	(1) 特定圃場（花巻市山の神）における第1世代幼虫のふ化は、平年より早く確認された。 (2) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に増殖を助長する条件ではない。(±) (3) 前年秋期の発生量は、平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ネギコガ】

- (1) 圃場の観察に努め、第1世代幼虫による加害が認められる場合には、有機リン剤等を散布する。
- (2) 有効積算温度から推察される第2世代の防除適期は、県中南部では5月第5半旬頃と推察されるが、気象条件により前後する可能性があるため、今後の発生予察情報等を参考にする。
- (3) 今後定植を予定しているところでは、定植時にジノテフラン水溶剤を、セルトレイまたはペーパーポットに灌注する。



図1 ネギコガ幼虫による食害痕（赤枠内）

りんどう

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンドウ ホソハマキ	並	やや少	(1) 5月の気温は、ほぼ平年並の予報で、有効積算温度から推測される羽化始期は、平年並。 (2) 前年秋期の発生量は、平年より少なかった。(一)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【リンドウホソハマキ】

- (1) まだ残茎がみられる圃場では、越冬世代成虫発生時期（県中南部で平年5月下旬から）までに残茎処理を徹底する。処理の際はできるだけ地際に近い部分から折り取り、株元まで残さないようにする。また、集めた残茎を圃場内に放置すると発生源になるので適切に処理する。
- (2) 重点防除対象は第1世代の卵・幼虫であり、成虫または潜葉痕および食害痕（図1、2）が認められたら薬剤を散布する。県中南部での防除適期は平年6月上旬であるが、防除開始時期は年によって変動が認められることから、今後の発生予察情報等を参考にする。
- (3) 前年、アディオフロアブルを散布しても被害が目立つ圃場では、ディアナSCまたはフェニックス顆粒水和剤を10日間隔で、2回散布して防除する（平成26年度試験研究成果、平成30年度防除技術情報参照）。
- (4) 産卵の大部分は葉裏に行われるので、下位葉の葉裏までしっかり薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。
- (5) 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部が萎れて曲がる被害（図3）を見つけたら折り取り、土中に埋めるなどして処分する。



図1 潜葉痕

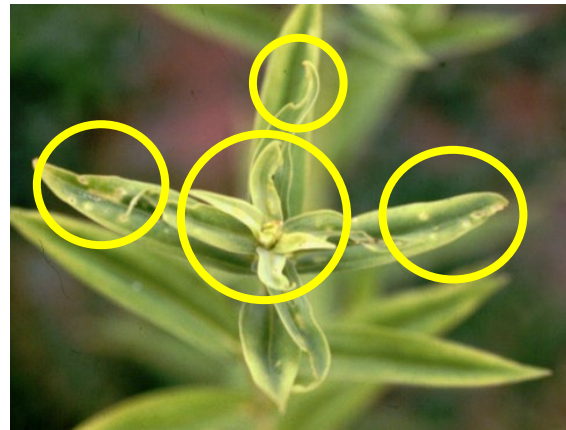


図2 生長部の食害痕



図3 生長部の被害